

小テーマ：「不登校・発達障害をもつ子どもたちも大事にされる教育」とは？

I. 今「学校になじめない子どもたち」とはどういう子どもだろうか。

(1) 文科省の「不登校対応事業」で想定している「傾向」

- ・ コミュニケーション能力、人間関係を築く力が不十分
- ・ 非行傾向
- ・ 引きこもり

(2) 「不登校」の要因・きっかけはまた別。

(3) 「2003年の『不登校問題調査研究協力者会議』報告」では次のように指摘する。

不登校との関連で新たに指摘されている課題は「学習障害（LD）、注意欠陥/多動性障害（ADHD）等の児童生徒」の件があり、小中学校の通常の学級の在籍者の約6%に達する。

II. それぞれのフリースクールでの実際の対応状況でいえば。

(1) 現在の教育と学校の状況との関係

- ・ 子どもにとって「安心できる」「楽しい」「自分を含めた人たちの未来につながる」という尺度からいってどんどん反対の方向に進んでいるといえるのではないか。
- ・ その理由は、今日の学校がいじめ問題の深刻化、学力偏重や管理主義の教育が深まり、「個性的」であったり、人とのふれ合いで苦手があったり、一定のハンディキャップのある子どもは「ノーマルスタンダード」外におかれることから、「学校になじめない」「学校のストリームからはじかれる」児童生徒が増える。

(2) フリースクールは、それらの「現在の学校になじめない」子どもをサポートしている。

※ 今の学校が変われば（良くなれば）問題は解決できるのか？

（次のことは現在のフォーマルな学校で確保されるだろうか？）

- ① 少人数で、一人ひとりの子どもの居場所とそれぞれに合った学びを保障している。
- ② 「学校」という場で、さまざまな年齢層の人たちと（生徒としてスタッフとして）自由に交流し得ている。
- ③ 総じて、一人ひとりが大切にされ認められている。教育活動で多様なプログラム（知識の学習、表現、体験、など）が組み込まれている。共生・共存・共同の理念を端的に推進している。

III. 学校教育法第1条校の問題だけで今日の教育・学校の方向づけはできない。フリースクールの教育は消えるシリュウ（支流）ではなく、シュリュウ（主流）の一つにならなければならない。